AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2017.9) 平成28年度:26-27.

デスカンファレンスを通した看護師のターミナルケアに対する認識の変化と今後の課題

阿部 さゆり,長瀬 経, 佐藤 亜衣, 辰巳 貴規, 飯田 愛生, 村上 閑香

デスカンファレンスを通した看護師のターミナルケアに対する認識の変化と今後の課題

旭川医科大学病院集中治療室
○阿部さゆり　長瀬　経　佐藤　亜衣　辰巳　貴規　飯田　愛生　村上　閑香

Ⅰ．はじめに

ICUでは急性期や重症患者が多く、患者の死に直面する機会は少なくない。しかし、スタッフの35％が5年目以下であり、新人のときからICUに所属しているスタッフも多く、ターミナルケアについての知識が少ないスタッフが受け持つこともある。また、経験があっても、患者が亡くなった際には後悔や無念さ、無力感を抱くこともある。

ターミナルケアにおける看護師の役割には家族ケアがあげられる。ICUでのターミナルケアは患者の意識がないため、患者に対する身体的ケアのほかに、家族に対するケアが重要であると考える。先行研究では、ICUの看護師は終末期にある患者の家族に対するケアの必要性を理解、認識し、患者家族にとってよりよい死を迎えるように配慮していることが明らかになっている２）が、ケアに対して振り返る機会や気持ちを共有する場は確立されていない現状がある。また、デスカンファレンスの目的は、亡くなった患者のケアを振り返り、今後のケアの質を高めることにあり、ケアを評価してこれからのケアに生かすことが出来る、患者・家族への理解が深まる、スタッフ間で気持ちを共有できるなどの意義がある。

Ⅱ．用語の定義

デスカンファレンス：亡くなった患者とその家族を対象として様々な視点でケアを振り返り今後の看護へ活かすためのカンファレンス

ターミナルケア：終末期の患者へ行う看護及び医療

Ⅲ．研究目的

印象に残った患者についてデスカンファレンスを行うことで、実際に行われていたケア、問題点や不足していたことを話し合い、看護師のターミナルケアに対する認識の変化を明らかにすると共に、ICUにおけるターミナルケアに必要なことを明らかにしたい。

Ⅳ．方法

1.研究の種類・デザイン　　質的研究

2.研究方法　対象患者について、年齢・性別・診断名・治療内容・家族背景を記載した資料をもとにデスカンファレンスを行う。デスカンファレンス終了後、ターミナルケアに対する意識の変化を調査するため、参加看護師に対して自由記載のアンケートを行う。

3.研究期間　　５月２５日～９月１５日

Ⅴ．結果

1．デスカンファレンスの実施

入院期間中に亡くなった患者１名に対してデスカンファレンスを行い、キーパーソンに必要な看護介入について話し合った。できなかったこととして、カンファレンスによる情報共有が不足していた、全身状態が不安定で家族と一緒にケアができなかった、キーパーソン以外の家族への介入が不足していたなどの意見があがった。できたこととして、部屋持ち看護師は家族に思いを聴き記録に残すことができていた、ICUという環境の限界を感じながら個々ではケアを検討していた、最後の家族の希望は確認できていたなどの意見があった。

2．デスカンファレンス後のアンケート

デスカンファレンスに参加した看護師12名にアンケートを実施し、アンケートの回収率は75％、有効回答率は100％であった。

デスカンファレンスに参加して、ターミナルケアに対する認識の変化を感じたのは88％であった。変化を感じた理由として、家族への関わり方に対する意識が変わった、より積極的に家族と関わることが大切だと感じた、ICUという環境には限界があることを認識した上でできることを判断していく重要性を感じたなどの意見があった。

Ⅵ．考察

デスカンファレンスを行い、個々で抱えていた思いを表出することで、スタッフ間で気持ちを共有することができ、個々の関わりから患者・家族の理解が深まった。先行研究ではICUの看護師は終末期にある患者の家族に対するケアの必要性を理解、認識し、患者家族にとって

よりよい死を迎えるよう配慮していることが明らかとなっており、デスカンファレンスからも個々の認識を確認することができたが、医療者が病室を頻回に出入りしたり、機械類やモニターが多く装着されていること、患者の全身状態が不安定であることから、ICUという環境に限界を感じたり、ケア介入や家族に対する関わり方に悩んだりしていることが明らかになった。そのため、患者の全身状態を確認しながら、ICUで出来ること・出来ないことを判断すること、全身状態の不安定な患者の傍に寄り添う家族の気持ちを理解し、希望に沿った看護を提供することが必要であると考える。

Ⅶ. 結論

１．デスカンファレンスを行うことでターミナルケアに対する認識が変化した。

Ⅷ. おわりに

本研究では、1事例の検討であり、他事例との比較検討やスタッフの経験年数での差は検証できていないため、今後はデスカンファレンスを定期的に行い、ICUでのターミナルケアを深めていきたい。

【引用・参考文献】

1）稲谷理沙,田中真弓,磯本暁子,他．ICUでの看取りと死を迎える患者・家族に対する看護師の思いの分析．日本看護学論文集：成人看護Ⅰ．2006;37:128-130

2）柏木哲夫・藤腹明子：系統看護学講座別巻１０ターミナルケア,医学書院,2006,30-38